

共同研究の前進のために

(金沢) 井森睦平

讀者から寄稿を寄せられたが、特に奇くこともないので、農村の社会学的研究の上で近頃頭に浮んでいるりとめのない断想の一端を記してみる。

近年社会心理学で人格や性格の研究上、従来のように数多くの性格の種別をそのまま扱わず、これを等質的なりの成果があげられていたようにする試みがなされ、かおいても、少くとも部落といつた基本的なものについては、その構造・意識にわたる今までとちがえられていた多種多様な移しい数の事項が、若干の統一的な因子に分解され得ないかと考える。このうちが見出されたならば東北の村であれ、九州の村であれ、また山村たると郊村たるとを問はず、共通の尺度基準から個々の村や部落を比較することも可能容易になり、一般化の点において農

研究通信

No. 19

1956年5月刊

村落社会研究会
編集部

仙台市片平丁：
東北大学教育
学部研究室内

村社会学の理論を一步前進せしめるに役立つ所が少くないと思う。

構造については、今までに調査蒐集されているあらゆる部落関係の慣行・習俗・行事などの資料、意識については全国的に実施する対部落態度調査の結果に對して、質的(例えば尺度分析など)、量的(例えば因子分析など)の統計的処理分析を加えるなどの方法によつてある程度の成果が得られるのではないかと思う。結果の一般の妥当性を盛むならば、どうしても全国的規模でやらねばならないので、致底一人の力の及ぶ所ではなく、共同研究に俟たねばならないのであろう。

家族の研究と並んで、農村研究は我が国社会学の中では比較的進んだ分野といわれるが、しかしたとえその成果には学問的意義はあるとしても、農村農民の生活にどれ程役立つているかということになると、甚だ疑わしいといわざるを得ない。以前はともかくとしても、今日のように社会学を専攻し、これを職業とする人が多くなると、どの研究分野にあつても、単に学問のための学問、調査のための調査といつたことではすまされぬ。何らかの意味で、社会の要望に答える所がなければならぬように思う。いかなる面において、またいかなる研究を通じて農村農民の生活に寄与すべきかということが問題になつてくるが、これについては隣接の農業経済学、経営学などから教えられる所があるのではないかと思うが、どうであるか。

「村落構造の史的分析」 と村落研究の課題

(仙台) 矢木 明夫

昭和廿六年夏以来、約五ヶ年の間、中村吉治教授を中心として行つてきた岩手県煙山村の調査研究は、その才一回の総合的成果として、「村落構造の史的分析」を日本評論新社から今回世に送り出したのである。この調査研究に関しては、従来も多くの方々から御支援や関心を寄せられていたので、ここに極めて簡単ではあるが、その内容の一端を御紹介し、あわせて村研の共同課題である「農家人口の変動と家族構成」について関連ある一見解を提示させていただくこととする。

本書はA5判本文九〇八頁であるが、これは従来中間報告として順次公刊してきたものに可成の補訂を行つたほか、新に相当量の原稿を加え、全体としての体系化をはかるための調整を試みたもので、個別研究とは異つた新たな総合的研究としての意図を有するものである。次に本書の内容である。これは岩手県煙山村(現在矢巾村の一部となる)の松ノ木部落の幕末より大正末に亘る時期の再生産構造を全体として五章十二節の中におさめて

る。その中は、才一章緒論 総論、調査地

について、才二章農村共同体 農業労働組

織、水利組織、林野利用組織、生活組織、才

三章土地所有と賃租、才四章商品経済、高

橋家の商品経済、村の商品経済、となつてい

る。右のうち、生活組織というのを一寸説明

すると、これは大体、年中行事や冠婚葬祭と

いつた所謂生活慣行をめぐる家の関係に中心

を置いてゐる渾然とした呼称であるが、今後

細分化されるであらう。以上のうち当然才二

章に重点がおかれてゐるが、才一章のうちの

総論が全体の序論にして結論ともいうべき性

格をもつてあり、他の部分はいすれもこゝを

出発点として展開し実証し、こゝへ帰着する。

次に本書の特色、つまりは共同研究の独自

性ともいうべき点についてその一端をのべる。

本書は文字通り村落構造を歴史的に分析する

ことを目標としてゐる。最近に村落構造とい

う主題のついた研究は決して少くない。しか

し実は一向に村落構造そのものは明かになら

ないばかりか、実はそうした問題意識すら欠

除してゐることもある。しかし、実は「村落

構造」そのものもつと真正面から取上げら

ねなければならぬのではないか。こうした

問題を解決することなしに、村落や共同体規

制の「意識」を論ずることではできない筈であ

る。村落構造は歴史的に変化する。それを何

か自然的なものとして、あるいは景観として

の現象形態だけで前提として済ましてしま

うことができるだろうか。ともかく検討しても

みないのである。検討を経てはじめてそうし

た特定の時点や形であらわれる村の位置付け

や特殊歴史性が明かになる。だから、まず村

をどういう社会関係であるか分析し、然る後

に総合的に把握する必要がある。多様な社会

関係を、自然的な混雑たる自然村落や階級構

成などに単純に解消してしまふことができな

い。階級関係は多くの社会関係の中の一つと

して、相関的に制約し制約されるものである。

こうした社会関係の分析、総合という過程の

中で村落そのもの本質をさぐるという方法

は、当然のこととして機械的な無批判な村と

家の対決や区分を排除する。我々はどこかで、

科学的検討の対象となるべきものを逆に前提

としてしまふことをさけるのである。

本分家関係という内容すら余りに多く

無批判に前提されてゐるのが今日一般である。

ともかく、我々がどこ迄成果をあげたかは

別として、我々が意図した所は右にみたよう

な所にあつた。だから個別に分析された社会

關係が、こゝで有機的に綜合され村の本質を浮び上らせる筈であつた。しかし本書の一部には必ずしもこうした意圖にそわないものも含まれてゐるかもしれない。

さて、村について右に述べたことは全く同様に、農家人口や家族構成、つまり家の問題についても該当するのではないか。家というものを社會關係としてとらえてくるとき、何と戸籍や宗門帳の家と農業労働組織として形成される家、あるいは婚礼葬式で集つてくる家族構成などがすれてくることか——といつた経験は誰にあつてもよい筈である。勿論そうしたものも単一なものとして一元的に一致して現象することがあることも歴史的に、地域的に可能である。こう考へてくると、封建社會で単婚家族が成立したと考へ、その後史的變化も考へず、またそうしたものが常にすべての場合の家である——農業労働でも年貢負担単位としても等々——と単純にきめてかゝることがいかに誤であることか。従つてもう少し我々は家そのものを社會關係の史的な分析と綜合を通して明かにしてゆくことに重点をおいてもよいのではないか。そうした過程を通じて、家族の歴史を明かにして、はじめて特定の社會の人口法則に近く適符

どを適用しうることになるのではないだろうか。以上いふ言されたことでありながら、尚新たな意義をもつ課題であると考へている。

一つの提案

(島根) 山岡栄市

あれから二ヶ月たつた今でも、ほのぼのとした温いものを感じているとき、今度は仙合からの封筒に入つた研究通信十八号が届いた。何よりも編集者の竹内氏や皆さんにお礼を申上げたい。はじめて村研に出席して色々と教えられるところが多かつたが、この度の通信を見て、会員の皆さんが研究テーマの焦点化や、そのための会の持ち方について実に積極的な御意見を寄せていられるのに刺激され、私も山蔭の一角からペンをとりました。

大会を有効にするための福武氏の御提案に對しては、全面的に賛成です。討議時間の短くことや討議内容が深みに欠けていることは、どこの研究会でも問題になつてゐるが、村研のように、隣接科學との接觸を密にして「知識を全体のものに」(有賀) するためには、

この点の打開について格別の工夫が必要であると思ふ。会期二日は理想的だが、一日として次のような方法は如何でしょうか。即ち「宿題委員」と「発表者」(特に特に問題意識を強くもつてゐると思われる)とが——出来たら各ブロック代表一名位を加えて——前夜に徹底的な事前討議をして頂き、翌日午後の討議題目の焦点を決定プリントにして翌朝會員に配布する。聴取質疑、討議参加をこの焦点にしばるよう各自努力する。

共同課題は今年度の経緯ときまつたが、本年の討議内容で今後の研究に重要な示唆を与えるものとして、過剰労働力を家族の外に析出する場合①長男は余り出ない、つまり誰が出るかということが社會學的問題になること②過剰労働力が家族内にあつても農業経営のセットの面からいうと、つまり農業経営的には析出できないことなどが指摘され、最後に「制度としての家」よりも「経営体としての家」にしばられるように重点が移行してきたのではないかと結論されたように記憶している。こゝらあたり、過剰人口を取扱う社會學と經濟學とのちがひと接觸点があり、また家族集団の変遷過程があるのではないかと、ノートを書き返しながら感じた次第です。

「家族の構造」変化の問題を来年度は大いに追求してみたいものです。また仙台の矢木明夫氏の「基礎概念への志向」は、基礎理論への究明が特に要請される今日、注目すべき御提言でありましょう。

札幌から

地方だより

「但し北海道を除く」とは、従来農村問題を取扱った人々の、北海道農村の取扱ひ方であつた。確に一見新天地の北海道は、如何にも近代的な農村社会が展開していかの如くに見える。目も盛かな大平原、泰西の古城を思わせる赤レンガのサイロ、点在する赤い屋根、緑の屋根の農家、そして悠々草を喰ひ乳牛の群E・T・C。しかしながら、同一国民社会、国民経済の中にあつて、どうして北海道に於いてのみ独自の農村社会の展開が見られる筈があるのか。確かに聚落立地や、歴史的條件や、生産型態等こそ異つてゐるが、やはり基

本的には北海道の農村も結局日本の農村なのである。日本農村を問題とする際に、一応北海道を除外して論ずることは、それ相応の理由のあることであるが、北海道農村社会の成立展開の条件と法則の相対的独自性を認識した上で、更に府県農村社会と同一の場所において、広く日本農村社会を論じてみることは、我々北海道在住の農村社会研究に従事するものゝ念願である。所謂「日本資本主義と農業」なる視点から云えば、歴史的複雑物を含むことが少いだけに、より純粹に、より明確にその間の関連を抽出することが出来る

と確信する。

この点に關し、最近民科札幌支部歴史部会の「農村共同体の基礎理論」農業部会の「北海道に於ける農地改革の評価」の討論会や農村省綜研北海道支部主催の研究会における「地代論」「所謂経済外約強制」「土地資本」等の共同課題による研究会は、研究のレベルはともかくとして、北海道農村社会研究の将来を暗示する。大なる意義を持つものと云うべきであらう。たゞ我國農村社会学界の大先達、北大教授の鈴木栄太郎博士は、依然として病床にあり、またその研究の視点も近來は都市社会に相向され、(近く公刊を予

定されている、都市社会学に關する著作は斯學に時期を劃すべきものと予想されている。)同研究室の研究動向が農村から離れていることは農村社会学界にとつて一抹の淋しさを与えている。

(東谷清次)

共同課題要目

一、課題「農家人口の変動と家族の構造」
二、着眼

- (1) 農家人口の分析を主題とし、これを家族構造との関連において究明する。したがつて、村落構造はこれを背景としてみるにとどめる。
- (2) 多数の統計的分析を必ずしも意図せず、むしろ少数であつても、主題にそくして深く多面的に追求する。なお、時代については、現時点を主として出来るだけ年代を廻つてその変化を解明する。

三、調査方法

- (1) 農家経営における農業労働力を分析し(労働力構成、労働力の年間配分、と*

課題委員会報告

三一・四・三〇

(一) 年報才三輯について

来年は大会の共同課題が、去年と同じこととなるので、「村落共同体の構造分析」の特輯とする。内容は、

1) 主論文 一般(有賀 喜多野)

東北(中村) 農業経済(星登)
岡山(福武) 流村(竹内)

2) 村落共同体に関する海外の研究

イギリス(執行) アメリカ(森岡)
ドイツ(住谷) ロンヤ(小森)
フランス(野口)

3) 学界動向

社会学 (川越) 経済学(木下)
法学 (潮見) 歴史学(永原)
人文地理 (佐藤)

をすることになった。

(二) 大会について

十月十一日又は十八日に、毎日新聞社講堂で行なう予定

(三) 課題について

今年には昨年のテーマ、「農家人口の変動と家族の構造」の継続とするので、以下に再録した大綱と、才三回大会の討論集を是非参照いただきたいと思えます。

尚、発表希望の方は、六月十五日までに、事務局まで御連絡下さい。報告者が出揃ったところで、一度あつまつていただき、報告についての討論を行ない、問題を整理しておきたいと考えて居る。

(出席者)

(三一・四・三〇)

有賀 喜多野
大内 小池
中島 福武
塚本 北川
松原 蓮見

(一三三)

*くに基幹労働か補助労働かの別、その家族上の地位別、性別、年令別等々)、その時代的变化を追求し、増加した人口がどういう形で経営内に吸収されてきたか、もしくは、減少したことによつてその労働力構成がどう変化したかを追求する。その処置の仕方は次の四つの形で考えられよう。

- ① 増加した人口がどういう形で経営のなかに吸収されているか
- ② 吸収されない労働力はどのように自家の農業経営外で処置されているか(副、兼業、通勤、出稼等、更に通勤の場合には、通勤先、職種、収入、農業期の場合の關係等はどのようであるか)
- ③ 処置され得ないものは(失業)
- ④ 非常労働人口の状況は

(2) 家族内の役割分担(家長、主婦、経営者等)が右の変化に対応しつゝ、どのように果されているか。家族員の身分上の変化(結婚、相続、分家、就職等)がどのように行われているか。また、それらの家族員の意識態度がどのように変わるか。(家産、家業の相続、分家、

